

# 老獺と樸鈍

——周文『在白森鎮』の四川人——

中 裕 史

## はじめに

周文（一九〇七～五二）は、個性的な四川作家の中でも別に風格を有する作家である。李劫人（一八九一～一九六二）や沙汀（一九〇四～九二）にみられる、諷刺のスパイスを利かせた創作が、四川作家の特色のひとつであるが、周文もまたこうした特色を持つ作家である。

しかしながら、一口に諷刺といっても、その叙述はそれぞれに趣を異にしている。李劫人の対象は、軍閥のみならず袍哥、官界の人物など大小さまざまな権力者であるが、沙汀の対象は、郷鎮の実力者である。一方で、周文は、主に軍隊の各レベルの指揮官や司令部に出入りする関係者をその対象としている。

また、諷刺の対象となる人物のとらえ方に注目すると、李劫人は成都市民の立場から民衆に害を及ぼす権力者に視線を向けているが、沙汀は郷鎮の村民と実力者の双方を視野に収めながら叙述を進める。周文はといえば、往々にして複数の権力者に焦点をすえて大寫しにしながら、権力者相互の抗争を書き付けていく手法を用

いている。

以前、長篇小説『煙苗季』における人物描写に着目して、自らの利益を図って相互に抗争を繰り広げる軍人たちの形象を、周文がどのように塑像しているかについて論じたことがあるが、その際に、周文が内面描写に長じていてこれを多用していると指摘した<sup>(1)</sup>。

本稿では、軍人を描く作品ではなく、地方官僚を登場させる中篇小説『白森鎮にて』（原題、『在白森鎮』）を材料とする。茅盾は、この中篇小説に言及して、「喜劇の情調があり、描いているのは正県長と分県長との闘争である」と述べているのだが、これにもうひとり軍部から派遣されてきた青年を加えた三人の主要人物の内面を、周文がどのように描写しているかについて分析し、内面描写が彼らの角逐のさまの叙述にいかなる効果をもたらしているかを考察するとともに、周文の諷刺の手法をより詳細に検討していきたい。

## 一 劉県長の形象

「よその県はどこも独立して自由な県長ひとりだけだというのに、おれの県には目障りな分県長がいやがる！ それもこないやな陳分県長が！」<sup>(3)</sup>

西康地方の一県を預かる劉県長にとって、陳分県長は目障りな存在であった。しかし、陳分県長は、この地方を支配している軍部の参謀長の親戚であり、一県長の力で簡単に追い払うことはかなわなかった。そのために、陰湿な方法で嫌がらせをされても、劉県長は表面上鷹揚な態度でやりすごしてきたのであるが、自分に賄賂をしてきた呉老娃を、陳分県長がその職権を越えて逮捕し、拷問にかけて贈賄の事実を白状させようとした

ことを耳にして、何とかして陳分県長を失脚させねば自分が危うくなる状況に迫り込まれたことを悟った。

そんな時、政治軍事学校を卒業したばかりの施服務員が軍部によって派遣されてきた。この息子と同じような年齢の若者が何のために派遣されてきたのか判然としない劉県長だったが、施服務員が軍長に報告書らしきものを書いているのを見て、この若者をひとつ利用してやろうと思いついた。

劉県長は施服務員をまず手なづけようとして、その部屋を訪れて話し込む。そして、どうして軍長に手紙を書いていたと思ったのかと聞かれると、つぎのように答えた。

「ハハハッ、心配せんでいい。」劉県長はいまが実行の潮時だとみて、軽く彼の肩をたたきながら冗談めかして言った。「わたしは考えたこともない。ただあの日、陳分県長が、軍長が施委員をわれわれの県に派遣したのは、同時にわれわれを探るためではないか、とわたしに言ったんだ。わたしは、いやいや、施委員はとても純潔な青年だよ、と言っておいたよ。」彼は高すぎもせず、低すぎもしない声でここまで言う話をやめた。指で八字の口髭をいじりながら、鋭い眼光をとばして、この言葉に対して彼がどのように反応するかをみていた。<sup>(4)</sup>

自分は疑念を持っていないが、陳分県長は施服務員が県政を監視するために派遣されてきたのではないかと疑っていることを、劉県長はさりげなく伝えて、どちらが味方でどちらが敵かを仄めかしている。そして、施服務員が「純潔」という言葉を聞いて素直に喜び、緊張感や警戒感を緩めて、学生時代のことやこれからの抱負を無邪気に語る様子を見て、劉県長は、心の中でひそかに陳分県長を失脚させる計画をたてるのだった。

このように、周文は、施服務員を学生上りの世故に通じぬ若者として描いている一方で、劉県長は官界に

長年身を置き、自らの利益と立場に対する嗅覚の鋭い、老獺な役人として塑像している。こうした劉県長の形象はその言動に加えて、外面描写によっても読者に効果的に伝えられている。

劉県長は、「脂ぎった丸顔」に「八字形の口髭」を生やしていて、上に引用した箇所にもあるように、心の中で思案をめぐらせる時にはいつもこの口髭をいじる。これらの特徴は、劉県長が官界で一定の地位を得て裕福に暮らしていること、および出世や保身のために怠ることなく頭を働かせていることを示唆している。

劉県長が思いついた陳分県長失脚の手立てとは、自分からするのではなく施服務員に告発させることであった。そうすれば自分には関係がなく、陳分県長の親戚である参謀長のラインからの反撃をうける恐れもないからである。ここに、自らは危険を冒すことなく責任を負うこともなく、他人を前面にたててその背後で利益だけをむさぼろうとする狡猾な役人の姿が如実に描き出されている。

この老獺な役人は、目的の達成に向けて着実に計画を進めていく。まず、施服務員と親しく話をして、県長に信頼され評価されているという錯覚を持たせるようにすることである。そのために、字の上手さを称賛し、為政者としての抱負を尋ね、早起きを誉めるなどの方法を用いる。施服務員の気持ちをひとまず引きつけることに成功すると、つぎに、陳分県長が匪賊と気脈を通じていると信じ込ませるために、県長自ら自衛団を率いて匪賊掃討に出かけることにして、施服務員にも同行を求める。

「弟よ、今日、君の本領を発揮する時が来た！ わたしを助けてくれるよう！」

「はい、行きましょう！」施服務員は非常に感動した。彼が今日突然「弟」と呼んでくれるとは思ってもみなかったので、にわかに元気を奮い起こして言った。「でもわたしはまだ銃を持っていません。」

劉県長は彼が真剣なのをみて、こらえきれずにハハハッと笑い出した。

「弟よ、本当に君を前線に送り出すと思うのかね。わたしはもっと大きなところで君の力を借りたいと思っている。どうか作戦と指揮を助けてくれるよう。わたしの拳銃を持っていれば十分だ。馬はとくに準備させてある。」<sup>(5)</sup>

「老弟」と呼んで施服務員に対して親しみを持っていることを伝え、「もっと大きなところで君の力を借りたい」という言葉で、施服務員の才能に対する評価を示すことによって、劉県長は彼の信頼を手にしたのである。そして夜間の行軍の途中で、ぼろを身にまとったひとりの男を引き立ててきて施服務員にみせる。

「旦那様、お助けを！ わたしたちの家は賊にやられました！」

「ああ、こいつは賊にやられた男だったのか！」 施服務員は思った。

劉県長はすぐに輿から出てくると、眉間にしわを寄せて尋ねた。

「お前はどこの者か？」

「申し上げます。わたしどもは町の者です。」

「何だと？」 劉県長は慌てて、脅すように言った。

「わたし……わたし……わたし……」

劉県長はすぐに小使いをちらっとみた。小使いは慌ててその物乞いのような男の背中に一撃をくらわして怒鳴った。

「気でも違ったか？ さっきは黄村の山の人間だと言ったじゃないか？」<sup>(6)</sup>

県長の尋問に対して、男が最初の答えを言い直す場面を設けることによって、周文は、小使いが連れてきた男が実際には匪賊の強奪にあっておらず、県長が考えた通りの受け答えをするよう、言い含められていることを示唆している。

この男はこの後の尋問にも答えを間違えたりするのだが、ようようのことで匪賊が陳分県長と通じていると話す。しかし、このことを施服務員に聞かせておいて、劉県長はただちに分県長を断罪したりせずに、民の中には分県長を恨んでいる者がいるかもしれないなどとぼけてみせる。

そして黄村に到着すると、村長の家に施服務員をひとり残して劉県長は出かけていく。明け方になって戻ってきた県長は、匪賊はすでに追い払ったが、陳分県長のいる白森鎮の方へ逃げて行ったと施服務員に言う。一緒に入ってきた村長も分県長が匪賊に通じていると言う。これで施服務員はすっかり分県長の容疑が事実であると信じ込むが、老獪な県長はさらにもう一押しする。十数人の農民が、白森鎮と黄村の農民五十名の連名で分県長の罪状を告発する書状を持って訴え出てきたのである。

劉県長は大きいため息をつき、首をふって言った。「うーん、どうだ、これは本当に難しい！ 以前から何度か彼に訓告をしているんだ。こういうことは、どうだ、軍長に報告しないと、もちろんよくない。だが軍長に報告すると、正県長が彼を排除しているなどと言われる。どうだ、難しいだろう！」

「難しいことなどありませんか？ 軍長に報告すべきことは報告しましょう！」

（中略）

「わかりました。あなたが難しいと言われるのなら、わたしが軍長に転送すればいいでしょう！ わたしは彼の親戚がどうのこうのといっって恐れたりしません。正義は行われなければなりません。われわれはやり

ましよう！」<sup>(7)</sup>

かばうようにみせて実は分県長を指弾する言い回しや、偽りの匪賊討伐の中での被害者による訴え、村民の告発状など幾つかの段階を入念に踏んで、劉県長は施服務員に陳分県長の悪行を信じ込ませ、服務員の手で告発状を軍部に転送させるとともに分県長の悪行を報告させることに成功した。

こうして自らは表に立たない形で当面の敵を排除した劉県長の内面の老獪さを、周文は、陳分県長の悪行の事実を容易に信じ込む施服務員の樸純ぶりと対比させる形で、迫真かつ丁寧に描き出しているといえる。

## 二 陳分県長の形象

劉県長に勝るとも劣らない老獪さを持ち、駆け引きに長けて、真正面からではなく水面下で陰湿な権力争いを展開する人物として、周文は、陳分県長を登場させている。小説では、まず劉県長が朝目覚めて夜来思案していた陳分県長のことを想起する場面からはじめて、劉県長が施服務員の部屋を訪ねてこの若者を利用してやろうと思いつく場面、黄村の村長が劉県長を訪ねてきて賄賂を贈った呉老娃が陳分県長に逮捕されたことの言い訳をする場面へと続く。そして、この後に、劉県長の手紙を受け取った陳分県長が県城にやってきて、劉県長と対面する場面を配している。

周文は、まず老獪な役人ふたりが対立していることを示し、つぎに劉県長の側から対立する相手を倒すための手段を仄めかし、対立の具体的な事案を読者に説明する。こうしておいてから、陳分県長を登場させ劉県長と対決させる場面をおくことによって、両者の立場や思惑、人物像の違いを対照的に、かつ鮮明に描き出して

いる。

劉県長は腹の中で冷たく笑った。「また何かたくらんでいやがる！ ふん、何が「管轄する区域内」だ！」しかし彼はつとめて何でもない風を装って、ゆっくりと茶杯を持ち上げると口をつけたり、眺めたりしながら、これからする駆け引きのことをあれこれ考えていた。それから、指で口髭をいじりながら話しはじめた。

「聞くところでは呉老娃が……」彼はまだ言い終わらないのに、慌てて口をつぐんだ。というのは、陳分県長が突然何かを思い出したかのように、ずるそうに眉毛をあげて腰をかがめ、上着の下の皮衣に右手を伸ばしながら、こう言ったからである。

「ああ、忘れていたことがありました。参謀長から手紙を昨日いただいたいて、監督殿にもよろしくという<sup>⑧</sup>ことでした。」

参謀長が遠い親戚であることを利用して、陳分県長は、その後ろ盾の権威をさりげなく、しかし強く示して劉県長を牽制し、言いたいことを言わせないようにする。それでも、劉県長が、呉老娃の贈賄事件の取り調べは県で行うべきであり、分県署の管轄は治安に関わる事件に限られていると、管轄権の問題を持ち出して分県長の抑え込みを図ろうとすると、陳分県長は、自分が調べた贈賄の具体的な状況を話題にして、劉県長にちくりと針を刺す。

「呉老娃の案件については、まことに些か奇っ怪に思うのです。どうしてあのような田舎者のなりで、何と四百元も出したのか、その四百元も黄村長の手に渡ったということですが。」



劉県長は怒るわけにもいかないし、怒らないわけにもいかない羽目になった。これじゃまったく自分の尊厳を打ち碎かれたってことだ。彼の唇はにわかに白くなり、互いに膠着状態のまま向かい合っていた。

「むろん、この件はわたしが徹底調査をしなければならぬ！」劉県長はこのようにひとこと言って、肩をちょっと聳やかすのが精いっぱいだった。

「それはいい。」陳分県長はさすがに眉毛をあげ、目をきらっと光らせて言った。<sup>⑨</sup>

軍部の参謀長を後ろ盾に、劉県長の収賄を摘発して追い落とそうとする陳分県長と、越権行為を控えるよう促して陳分県長の策謀を阻もうとする劉県長の、火花を散らす内面の駆け引きが、息をのむ緊張感のもと、巧みに描写されている。

周文は、このもうひとりの老獪な人物につきのような外面描写をほどこしている。

それは無表情な蒼白の猿顔で、とりわけ狡猾な二枚のうすい唇とすこし曲がった陰險な尖った鼻、そして黒目と白目がせわしなく動く悪賢い小さな目とが、いっそう憎らしさを増していた。<sup>⑩</sup>

猿顔に狡猾な唇、陰險な鼻、悪賢い目と、それぞれに負の意味の形容詞をおいたのは含蓄を減じる嫌いなしとしないが、ともかく劉県長の脂ぎった丸顔と好対照をなす貪吏を、周文は、これまでみてきたように内面と外面の両方から塑像しているのである。

前述したように、劉県長の企みが功を奏して、軍部に告発状が届けられた。その結果、陳分県長には免職の処分が下ったが、劉県長が期待した、逮捕や取り調べには至らなかった。そのうえ、新たな分県長が任命され

るまで劉県長が分県署の業務を暫時兼任することとなった。この業務引継ぎを利用して、陳分県長は意趣返しを企む。

意趣返しをあらかじめ見越した劉県長は、施服務員をおだてあげ、分県長の手当てを折半するという条件までのませて、施服務員を分県署のある白森鎮に、たったひとり小使いをつけただけで送り込む。陳分県長は、最初は協力するようにみせて、引継ぎ完了の文書に公印を押させると、分県署の吏員をすべて退去させて施服務員を立ち往生させたのであった。

陳分県長の意趣返しはこれだけでは終わらない。白森鎮の町民が孤立した施服務員に協力する動きをみせると、匪賊の頭領である馮二王を分県署に出向かせて、施服務員を脅しつけるとともに、匪賊と通じていると町民に思わせて離反させた。陳分県長は、劉県長への復讐こそ果たせなかったが、劉県長の手先となる形で告発状を転送して自分を免職に追い込んだ施服務員だけは、完膚なきまでに叩きのめしたのであった。

陳分県長のこうしたしたたかさは、その策におちて右往左往する施服務員の未熟と対比させる叙述によって、鮮やかに描き出されているといえるだろう。

### 三 施服務員の形象

老獺なふたりの貪吏に翻弄される施服務員は、政治軍事学校を卒業すると軍部の命令で劉県長のところに派遣されてきた。彼は学校で学んだ知識を実際に活かして、人民を教育し、産業を振興して、豊かな暮らしを実現するために奮闘しようと考えている、情熱的ではあるが、世間知らずの若者として描かれている。

「そこで金を出す者は金を出し、力を出す者は力を出して、みんな道路を作り、工場をたて、商店を立て、通りに車が走ります。農村はというと、木をたくさん植えて森や林にし、種子を改良し、肥料を改良し、農具を改良して、とても優美な田園生活に変えます。」<sup>11</sup>

これは政治の面での抱負を劉県長に問われた時の返事である。学校で学んで胸に抱いた理想をそのまま吐露している、ある意味で無邪気であり樸鈍である青年の姿が目には浮かんできく。

施服務員は、劉県長の匪賊征伐に同行した際にも、馬上で、そして到着した黄村長の家でとりとめもない想像にふけていた。

彼は、蠟燭を二本灯したテーブルの上で、自分が地図に覆いかぶさるようにして、参考にするために用意した軍事学の書物の頁をめくりながら、どのように兵士や将校を配置するか作戦をたて、団員たちをあの月明かりのもと暗い山に向かわせて戦わせる指揮をとっているところを想像した。そして事が済んだ後に、軍長がどのように褒奨の電報を打ってくるだろうか想像した。<sup>12</sup>

テーブルの上に置いた軍事学の書物を読みながら匪賊討伐の作戦をたて、自分が指揮をとっているところを思い描く。政治軍事学校を卒業したばかりで何ひとつ実戦を経験していない施服務員の学生気質を残したままの未熟な形象を、周文はこうに描写している。匪賊の状況を把握しないまま机上で作戦をたて、その作戦によって討伐を成功させて、軍長から褒奨の電報をもらうところまで想像する。このように根拠のない自信を持つ、無邪気であると同時に些か心もとない人物として描いているのである。

施服務員の無邪気さは、ふたりの老獺な役人の詭計に手もなく引つかかるところに、より直接的に示されている。陳分県長が匪賊と通じていることを劉県長によって信じ込まされた経緯は前述したので、ここでは、陳分県長が劉県長の悪辣さを述べ立てるのに乗せられてしまう場面を挙げておく。

「わたしは本当にこんな狡猾な古狸をみたことはありません！ 引継ぎを終えて、あなたがわたしを送り出してくれた時、あなたのことを思って驚いたのです。「なぜ？ なぜ彼ひとりだけで引継ぎをするのか？ ひとりで引き継いでどうするのか？」と。それですぐ食事を済ませて様子をみにとんできたのです。劉県長という人はあなたを利用しただけでなく、ひどい目にあわせているのですぞ！」彼はしゃべりながら、たえず手ぶりも交えて語気を強めるとともに、施服務員の表情の変化を注意深くみていた。彼の声が高くなるにつれて、施服務員の顔にしだいに怒りの色が強くなってきた。<sup>13</sup>

陳分県長は、施服務員を「老哥」と呼んで若輩であっても尊重する態度を装う。劉県長に「老弟」と呼ばれていた施服務員にとっては、この呼び方の相違はすなわち尊重の度合いの相違として感じられたことであろう。陳分県長は、そのようにお膳立てをした上で、施服務員が、分県署の吏員の退去によって孤立無援となり、立ち往生する羽目に陥っているのはすべて劉県長の仕業であると吹き込む。孤立無援の窮状は、実のところ劉県長に意趣返しを目論む陳分県長の奸計であることにも気づかず、劉県長に対して憤りを覚えるようになる。

そして、白森鎮の有力な町民が、分県署の業務を当面担ってくれることになり、しかも自分を正式に分県長に委任してくれるよう劉県長に陳情書を提出してくれたことに安堵したのもつかの間、劉県長からは、前任者と結託して民衆を扇動し、県長の名誉を棄損したとして軍長の処分を待てとの書状が送り付けられてきた。そ

の上、前述したように、陳前分県長の悪だくみによって匪賊の頭領の訪問をうけ、その関係を疑った町民に見放され、分県署に押し寄せられるに至って、施服職員はたったひとり馬に飛び乗って白森鎮を逃げ出したのだった。

「どこへ行くう？」

彼の心は傷みはじめた。彼は道がなくなったと思った。ここにはいられなくなったし、県に行くこともできない。しかもこうして大失敗をしでかして、どのような前途があるというのだろうか！<sup>14</sup>

最初に登場した時には、劉県長に対して、政治軍事学校での学問や施政への抱負を無邪気に語っていた施服職員が、小説の結末の部分では、陳分県長に欺かれ、劉県長に見捨てられて奈落の底に突き落とされる。周文は、この運命の急転と落差の大きさによって、世間知らずの青年の悲劇を描くと同時に、彼を窮地に追いやっただふたりの県長の老獪と狡猾とを前面に押し出しているのである。

#### 四 西康地方における軍閥支配

これまでみてきたように、『白森鎮にて』は、県長と分県長が相手を蹴落とそうとして互いに暗闘を繰り広げ、その間にある奇妙な立場におかれた服務員を巻き込んで苦渋を嘗めさせるというストーリーである。周文はどのようにしてこのストーリーの想を得たのであろうか。まず、周文がこの小説を書いた当時の西康地域の状況をみておくことにする。

西康地域とは、現在の四川省西部、すなわち北は青海省、西はチベット、南は雲南省に隣接する地域のこと

である。後の一九三九年には西康省として省のひとつに数えられるようになるが、中華民国の初期には、川辺特別行政区と呼ばれていた。<sup>(15)</sup>

この地域では、現在の四川省とチベット自治区の境界線である金沙江を越えて進んでくるチベット軍との戦闘や小競り合いがたびたび起こっていた。たとえば、一九一八年には、チベット軍が瀾滄江を渡り、さらには金沙江を越えて東岸の石渠、徳格、白玉といった諸県を攻略した。<sup>(16)</sup>

川辺特別行政区には川辺鎮守使が置かれて、この地域の行政や軍事を管掌していたが、一九二三年に当時の川辺鎮守使であった陳遐齡を、四川の有力な軍閥のひとつであった劉成勳が打ち破って、この地域に盤踞するとともに、この既成事実を段祺瑞政府に認めさせて、川辺鎮守使を廃して新たに設けられた西康屯墾使の地位を手にしたのであった。<sup>(17)</sup>

しかし、軍閥間の抗争や戦闘の絶えない四川にあっては、劉成勳の支配も長くは続かなかった。一九二七年には、国民革命軍第二十四軍の旗印を掲げていた四川軍閥の劉文輝が、劉成勳の根拠地である雅安を攻撃して占領し、劉成勳の軍隊を配下に収めて、この地域に覇を唱えた。<sup>(18)</sup>

周文が生まれて青年時代までを過ごした西康地域は、劉成勳や劉文輝といった軍閥が意のままに支配する地域であった。周文が一九四〇年に書いた自伝<sup>(19)</sup>によれば、周文は一九〇七年に雅安に近い榮經県で生まれた。五歳の時に父親が病死してからは、母親が女手ひとつで苦勞して周文を含む三人の子を育てたが、三弟もまもなく幼くして亡くなった。大黒柱を失った一家に世間は冷たく、父方の叔父たちを始めとして周囲から蔑まれ、侮辱されて辛い日々を過ごした。

ところが、母方のいとこが川辺軍の連隊長と結婚したことで、中学生であった周文の人生は軍隊の方に向けて舵を切るようになる。母親の意向で中学を退学させられ、旅団長に昇進したいとこの夫の司令部で給仕とし

て働くようになる。まもなく劉成勳の部隊との戦闘がはじまり、周文の部隊も各地を転戦するが、結局は敗軍して雅安に戻ってきて、劉成勳の傘下に加えられる。この時の転戦の間に、周文は戦場に横たわる戦死者を幾度となく目にして、戦争の残酷さと犠牲者の悲しみを心に刻み付けたのである。こうした思いは、以前拙論で考察したように<sup>(20)</sup>、後に、上官の横暴と兵士の苦難、兵士同士の連帯感を、実際に経験した者ならではの現実味ある筆致で描き出した、幾つかの短篇小説に見事に反映されている。

劉成勳の支配下にあっても、周文はそのままこの夫の司令部で書記と公印管理の仕事を担当する。そこで目の当たりにしたのは、軍人、官僚とその周辺の人間がすこしでもいい地位と利益を得ようとして繰り広げる、あさましい争いであった。十九歳の時には、アヘンに関わる利益に目をつけた母親が、息子に禁アヘン委員の職を得させようとして、いとこの夫に対して求職活動を展開し、他人を蹴落として、周文を副委員にすることに成功した。しかし、取り締まりに派遣された先で正委員がひとり罰金の徴収などで懷を肥やしたのに対して、副委員は蚊帳の外に置かれた。これに憤った母親が正委員に掛け合って利益の分け前を奪い取ったことにも、周文は心を痛めた。司令部でのこうした醜悪な人間模様は、以前拙論で検討したように<sup>(21)</sup>、周文唯一の長篇小説である『アヘンの苗の季節』（原題『煙苗季』）に如実に描き出されている。

西康地域の支配者が劉成勳から劉文輝に代わると、それまでの度重なる苦勞によって蝕まれ、衰弱した精神と身体を立て直し、腐敗しきった故郷を離れて新たな人生の一步を踏み出そうと決心して、周文は、自らも染まってしまっていたアヘン吸引の悪習を断ち切るとともに、第二十四軍が開設した川康辺政訓練所に入った。

この訓練所での生活は周文を大きく変えた。日々の軍事訓練によって身体を鍛え上げ、政治学や経済学を学び、帝国主義や三民主義について学んだ。私塾で経書しか学んでこなかった周文にとって、こうした学問は新鮮であり、視野を広げてくれるものであって、故郷のことにとらわれるのではなく、大きく社会や国家の在り

方、行く末を考えることの重要性に気づかせてくれたのである。

訓練所の課程を半年で終えると、周文は打箭爐（現在の康定市）に派遣されて、西康政務委員会の服務員となった。打箭爐に赴任してまもなく、近くの瀘定県化林坪で督察員として道路建設を監督する任務を与えられたが、この時、瀘定県長と化林坪を預かる分県長の間でまさに激しい抗争が行われていて、若く未熟な周文はその渦中に否応なく巻き込まれていく。

県長は周文を伴って巡視に出かけた際に、人を使って分県長の汚職と匪賊との関係を訴え出させ、その場に立ち会った周文に西康政務委員会に報告させるように仕向けた。その結果、分県長は失職し、県長がその業務を代行することになる。県長は引継ぎが煩わしい上に、代行期間が短いことを嫌って、周文に代行を委託する。周文が化林坪に赴いてみると、分県長はさまざまに嫌がらせをし、挙句に匪賊を寄こして脅しつける。県長と分県長の双方に利用される形になった周文は督察員を辞して政務委員会に戻ったが、後に、分県長が県長の所業を告発して免職に追い込んだことを知った。

『白森鎮にて』のストーリーと人物設定は、周文の服務員時代の経験を下敷きに構想されたものである。前述した劉県長には瀘定県長が、陳分県長には化林坪の分県長が、そして施服務員には外ならぬ周文自身が投影されているのである。

## 五 周文の内面描写の特徴

短篇小説では兵士など下層の人びとを主役にする周文であるが、対照的に、長篇小説『アヘンの苗の季節』と中篇小説『白森鎮にて』では、それぞれ将領クラスの軍人と県長クラスの官僚を中心に置いて、その言動を



諷刺の手法を用いて叙述している。魯迅は、『中国小説史略』で清末の譴責小説を評して、「凡そ叙述する所は、皆な迎合、鑽營、朦混、羅掘、傾軋等の故事」だと述べているが、周文の叙述の対象もまさに、迎合や取り入り、ごまかし、金儲けの算段、排斥などの行為である。

しかし、周文は、これらの行為を、登場人物の言動によって直接に叙述するだけでなく、憎悪や打算などの心理描写、あるいは第三者に対する働きかけなどの間接的な叙述によって示唆する方法をしばしば用いている。

「あの一件は」、彼は腹立たしかった。「あれは俺の事件のはずだ。しかも黄村長の手から人の金を受け取ってしまった。だがあいつは犯人をすっかり捕まえやがった。そのうえあいつの管轄内でのことだといいやがる！……あいつはどれほどの者だ？ たかが分県長だ！——あいつが匪賊の頭領の馮二王とつながっているという者もある！——理屈からいえば、分県長は警察沙汰の類の案件を処理するだけなのに、こんな事件にまで手を出しおって！ この件でまずいのは俺が人の金を受け取ってしまったことだ！ あいつがもし俺の秘密を知ったら、そうしたら……」

彼は慌てた。背中をたくさん針で思い切り刺されたように、どっと汗が出た。<sup>(23)</sup>

右は『白森鎮にて』の冒頭、劉県長が目敵にしている陳分県長のことを考える場面である。劉県長の脳裏には、自身の収賄の一件、陳分県長が手を出してきても越権行為を認めないこと、陳分県長の地位に対する蔑み、陳分県長の悪事、再び陳分県長の越権行為、再び自身の収賄の一件と、幾つかの思いが駆け巡っている。

この部分の叙述は、主人公であるふたりの人物の関係を説明してストーリーの展開をあらかじめ示す役割を果たしているだけでなく、劉県長の形象を効果的に読者に伝える機能をも担っている。すなわち、収賄の一件

は劉県長が貪吏であることを、陳分県長に対する感情は敵意とともに輕蔑を、思いの反復はそれらのことが劉県長にとって重大であることおよび劉県長の小心さを、それぞれ示している。

張大明は、周文の心理描写をつぎのように評している。

三十年代の左翼作家の中で、周文ほど熟練した心理描写を運用している者は實際多くはない。彼の小説創作は、どの作品にも十分な心理描写があり、しかもそのすべてに特色があるということができる。<sup>(24)</sup>

周文は、心理描写を巧みに用いることによって、劉県長と陳分県長という海千山千の人物の塑像に成功しているといえよう。しかし、『白森鎮にて』においては、加えて施服務員という青年を、これら老獺な人物の間に配することによって、貪吏間の抗争をより複雑な、そしてより現実的なものとして印象付けるとともに、彼らふたりの老獺さをいっそう際立たせていることも指摘しておかねばならない。

前述したように、施服務員は、劉県長に水を向けられると、熱っぽくしかしぺらぺらと施政の理想を語り、匪賊征伐の際には、自身の戦略が功を奏して軍長から褒奨の電報を受け取るところまで夢想する青年である。

この、学生気分が抜けきらず未熟ではあるが、実直な人物が、劉県長と陳分県長にそれぞれ欺かれ利用されて、八方ふさがりの状況に陥ってしまう。

空には真っ黒な一面の雲が流れもせず、周りを暗闇に囲まれている。また灰色がかった雲も黒色に染まってしまう、あたりには黒い瘴気がたちこめていた。下をみれば数十丈もある深い谷がどんよりとした黒い霧に覆われて、蛇のような小さな川と川沿いの人家とをまるごと呑み込んでしまっていた。

彼は両頬が冷たく湿っているのを感じてはじめて涙があふれだしていることに気づいた。しだいに真っ暗になってきた空を我知らず仰いで、彼は深く長いため息をひとつついた。<sup>25</sup>

小説の結末部分は、施服務員が白森鎮をひとり逃げ出す場面であり、右のような風景描写がなされている。黒い雲に灰色の雲、そして空の闇と、濃淡のついた水墨画を思わせる静的な描写に続けて、黒い霧が蛇のような川と川沿いの人家とを呑み込むとする動的な表現を置く。これらは、施服務員の眼前にある風景であると同時に、その胸中の投影でもあろう。これまでみてきたような心理描写のもうひとつの方法として、周文は、心象としての風景の描出によって登場人物の内面を浮き彫りにする方法も用いているのである。

## 六 おわりに

周文は、ふたりの老練な役人の間に未熟な青年を配して、老獪ぶりを対照し、老獪と樸純を対比することによって、諷刺の筆致を際立たせている。劉県長と陳分県長は、前述したように、若き日の周文が実際に接した県長と分県長がそのモデルとなっているのだが、こうした役人は西康地域に特有の存在ではなく、少なくとも四川省には普遍的にみかけることができたようである。

抗日戦争期に県民から告発された県長について調査した今井駿氏の研究によれば、告発理由はその半分近くが汚職、ついで、県民を不当に逮捕したり、恣に関所を設けて徴税したりといった職権濫用、さらに哥老会や匪賊との結託となっている。<sup>26</sup>

こうした不正を働く県長の、いわば典型として、周文は劉県長と陳分県長の形象を作り出したといってい

であろう。『白森鎮にて』におけるこのふたりの登場人物は、實在の人物をもとに輪郭を描き、普遍的に存在する貪吏のタイプを用いて肉付けをほどこして塑像されているがゆえに、ある種の親近感あるいは既視感を持って読者に迫ってくる。

さらに、周文特有の内面描写および老獺と樸鈍の対比の手法によって、劉県長、陳分県長と施服務員の三人の個性が鮮やかに映し出されている。『白森鎮にて』は、中華民国期の西康地域に生きた四川人の姿を見事に再現しえているのである。

## 注

- (1) 拙論「周文における諷刺」『煙苗季』の人物描写から（『アカデミア』文学・語学編第九五号、南山大学、二〇一四年）。
- (2) 茅盾『煙苗季』和『在白森鎮』（上海魯迅記念館編『周文研究論文集』、上海社会科学院出版社、二〇一三年、五六四頁）。原文は以下の通り。  
 『在白森鎮』有喜劇的情調、寫的是正縣長和分縣長的爭鬭。
- (3) 『周文文集』第一卷、作家出版社、二〇一一年、四六五頁。原文は以下の通り。  
 「别的縣份都只是一个獨立自由的縣長，而我這一縣偏有這麼一個令人掣肘的分縣長！而且偏是這麼一個可惡的陳分縣長！」
- (4) 『周文文集』第一卷四七〇～四七一頁。原文は以下の通り。  
 「哈哈，你不用多心！」劉縣長覺得趁這時正好下手了，於是輕輕一拍他的肩頭玩笑似的說，「我是并没有想到的。只是那天陳分縣長向我說：『軍長把施委員派到我們這縣來，不是來同時給軍長偵探我們的吧？我說，那裡那裡，施委員是一个頂純潔的青年……』」他用着不太高，也不太低的聲音說到這裡就停止了，用手指拈弄着八字胡鬚尖，射出很銳敏的

眼光把他看着，看這句話會使他起着怎樣的反應。

(5) 『周文文集』第一卷四八五～四八六頁。原文は以下の通り。

「老弟，今天是你用你本領的時候了！你去幫我的忙吧！」

「好，我就走！」施服務員非常感動了，想不到他今天突然稱他「老弟」，立刻挺起精神來說，「可是我還沒有槍。」

劉縣長見他那麼認真，忍不住哈哈笑起來了……

「老弟，你以為我真的讓你上火線麼？我要借重你更大的事呢，請你幫我計劃和指揮。你只要帶我的一支手槍就是。至於馬，我已叫人給你預備了！」

(6) 『周文文集』第一卷四八七頁。原文は以下の通り。

「大老爺伸冤！我們家給匪搶了！」

「哦，原來他竟是被匪搶的！」施服務員想。

劉縣長趕快走出轎來，皺着眉頭問道……

「你是那裡人？」

「給大老爺回，我們是城裡人。」

「甚麼？」劉縣長着了急，威嚇地說。

「我……我……我……」

劉縣長趕快望聽差一眼，聽差就趕快在那叫花子似的人背上一掌，生氣地說……

「你發昏了嗎？你剛才不是說你是黃村山邊上的人？」

(7) 『周文文集』第一卷四九二～四九三頁。原文は以下の通り。

劉縣長大大的嘆一口氣，搖一搖頭，道……「咳，你看這種事真難辦！我從前就向他告誡過幾次。這種事情，你看，我要不向軍長報呢，當然不對；但要向軍長報呢，人家又說我正縣長排擠他！你看，難不難！」

「這有甚麼為難？應該要給軍長報去就給軍長報去！」

(中略)

「好，你既然爲難，那麼我幫你給軍長轉去就是了！我倒不怕他甚麼親戚不親戚！正義應該做，我們就做！」

(8) 『周文文集』第一卷四七七頁。原文は以下の通り。

劉縣長在肚裡冷笑一下：「你又來給我玩甚麼鬼把戲！哼，還說甚麼你「管轄的區域內」呢！」但他竭力擺着不在乎的樣子，穩重地也端起茶杯攔在嘴邊一面抿了抿，一面眼看看着杯子，計劃着要談判的話。之後，就用手指拈擗一下胡鬚說起來了..

「聽說吳老娃——」他還沒有說完一句，立刻一怔地把嘴縮住了，因爲他看見陳分縣長忽然記起甚麼來似的，狡猾地把眉毛一揚，一面躬腰曲背地把右手伸到大衣下面的皮袍裡面去，一面說..

「呵呵，我還有件事忘了。參謀長昨天來了信，他附了一筆問候監督。」

(9) 『周文文集』第一卷四七九頁。原文は以下の通り。

「至於吳老娃這案件，的確使我感到一些奇怪。怎麼那樣一個土老兒的樣子，居然花過了四百塊錢，而這四百塊錢據說是由黃村長過手的！」

劉縣長弄得憤怒也不是，不憤怒也不是。這簡直把自己的尊嚴都給打毀了！他的嘴唇頓時烏白起來，彼此僵了似的對望着。

「自然，這事情我要徹查的！」劉縣長只能這樣說了一句，聳一聳肩頭。

「這很好。」陳分縣長狡猾地眉毛一揚眼光一閃，說。

(10) 『周文文集』第一卷四六五頁。原文は以下の通り。

那是一張寡情的蒼白色的猴子臉相，尤其是那兩片狡猾的薄嘴唇，和一條陰險的有點彎曲的尖鼻子，以及那一雙狡詐多端的黑白靈動的小眼睛，更顯得可惡！

(11) 『周文文集』第一卷四七〇頁。原文は以下の通り。

「於是出錢的出錢，出力的出力，大家都把馬路修築起來，工廠建立起來，商店弄得堂皇起來，街上跑着汽車。至於鄉村，多培植森林，改良種子，改良肥料，改良耕具，使它變成一種非常優美的田園生活。」

(12) 『周文文集』第一卷四八六頁。原文は以下の通り。

他預想着在一張點了兩支洋蠟燭的桌子上，自己將怎樣伏在一張地圖上，一面翻看着備作參考的軍事學書，計劃着怎樣排兵布將，指揮着那些團丁們向那月光下黑黝黝的山峰去作戰。而事過之後，軍長會怎樣來電嘉獎。

(13) 『周文文集』第一卷五二〇頁。原文は以下の通り。

「我實在看不慣這些老奸巨滑！當你接完交代，送我出去的時候，我就替你很喫一驚，想……「怎麼呢？怎麼他一個人接事？他一個人接下來怎麼辦？」所以我趕快把飯喫了就趕來看你了。老哥，這劉監督不但利用你了！而且把你害了！」他一面說着，不斷的用手勢加強語氣，一面注意的看着施服務員臉色的變化，他的聲音漸漸提高，施服務員臉上的憤怒也漸漸增強起來了。

(14) 『周文文集』第一卷五四二頁。原文は以下の通り。

「哪裡去？」

他傷心起來了，他覺得沒有路走了！此地既不能住，縣裡也不能去了！而這回敗壞了之後，前途是怎樣的呀！

(15) 賈大泉主編『四川通史』（四川人民出版社，二〇一〇年）第十章「西康建省与治康措置」二六九頁。

(16) 任之強・任新建『四川州縣建置沿革圖說』（巴蜀書社，二〇〇二年）「第二十四幅 民國時期（上）行政區劃圖說」四四頁。

(17) 同前注（15）。

(18) 喬誠・楊續云『劉湘』（華夏出版社，一九八七年）第七章「北伐軍與劉湘易幟」九三～九四頁および「有關人物簡介」二八〇頁および二八一頁。

(19) 『周文文集』第四卷には、一九四〇年に執筆した自伝が「自伝（二）」として、執筆時期の記載がないが一九四六年から四八年の間に書いたものと推定される自伝が「自伝（二）」として、ともに収載されている。

(20) 拙論「軍隊小説にみる周文の特徴——短篇小説を中心に」（『アカデミア』文学・語学編第九三号、南山大学、二〇一三年）において、「雪地」、「山坡上」、「俘虜們」の三編に注目して、上官の横暴に苦しむ下級兵士の間にみられる連帯感を、ほのかなユーモアを感じさせる筆致で描いていることを論じた。

(21) 拙論「周文における諷刺——『煙苗季』の人物描写から」（同前注（1））において、禁アヘン委員や新設の連隊長

の職をめぐって、軍人たちが陰に抗争を繰り広げる、その腐敗ぶりを痛烈に諷刺していることを論じた。

(22) 『魯迅全集』第九卷（人民文学出版社、一九八一年）第二十八篇「清末之譴責小説」、二八三頁。

(23) 『周文文集』第一卷四六五頁。原文は以下の通り。

「那一件案子，」他憤憤地想，「那是該我的。而且我已從黃村長手裡得過人家的錢的，但是他把人犯通通弄去了！還說是在他管轄區內的！……他是甚麼東西？不過是分縣長！——有人還說他和土匪頭子馮二三來往呢！——照道理說，分縣長不過管管「違警」之類案件的，但是那樣的案子他又弄去了！而這回糟糕的是我已經得了人家的錢的！假使他知道了這秘密，那就……」

他心裡一急，脊梁便像有許多針尖猛力一刺，馬上泌出汗水。

(24) 張大明「周文論」（中國現代文學研究會・中國現代文學館合編『中國現代文學研究叢刊』一九九五年第三期、作家出版社、二三〇頁）。原文は以下の通り。

在三十年代的左翼作家之中，熟練地運用心理描寫如周文者，實在不多。他的小説創作，可以說每一篇都有充分的心理解寫，而且都有特色。

(25) 『周文文集』第一卷五四二頁。原文は以下の通り。

天上烏黑層層的死雲，被黑暗從天周包圍了，還有些發灰的雲層也給染上了黑色，成了一片烏煙瘴氣。下面幾十丈深的山洼，黑霧沈沈的，已把那條蛇似的小溝和溝邊的人家完全吞沒了！

他感到了兩頰水濕，才知了已經滾出淚水來了。他不由地仰望著那漸漸黑暗下來的天空，深長地嘆了一口氣。

(26) 今井駿『四川省と近代中国——軍閥割拠から抗日戦の大後方へ』（汲古書院、二〇〇七年）第3篇「日中戦争期の四川省における地方行政と地方自治」第1章「日中戦争期の四川省における地方行政の実態について」（四八九頁）。

追記 本稿は、平成三十年度文部科学省科研費基盤研究（C）「文学を通じて見る中華民国期における軍隊の存在感と影響力についての研究」（課題番号 18K00359）の成果の一部である。



---

## The Craftiness and the Immaturity

——The men of Sichuan Province in “In Baisen Village” by Zhou Wen——

Hiroshi NAKA

### Abstract

Zhou Wen put a young man between two veteran prefectural governors and contrasted the craftiness of the two prefectural governors and compared the immaturity of the young man with the craftiness of the two veterans in his medium-length novel “In Baisen Village”. The two prefectural governors—governor Liu and vice governor Chen—were modeled on the actual prefectural governors who Zhou Wen had associated with in his youth. Governors of this kind are not peculiar to the XiKang region Zhou Wen had lived in, but are universal among Sichuan Province at least. Zhou Wen made figures of the two governors as a typical example of crafty local government officers. Therefore, they had power to make a deep impression—some kind of a sense of closeness and some kind of *déjà vu*—on the readers.

Through the outstanding description of the inner side of his characters and the contrast between the craftiness and the immaturity, Zhou Wen successfully reproduced the men who had lived in Sichuan Province in the first half of the 20th century.